

ニュースレター

不二聖心女子学院高等学校 Tamaki T.

ー私とカンボジアスタディツアーが出会うまでー

私は、このカンボジアスタディツアーが“国際的な助産師になる”という夢の実現に向けた大きな一歩になると確信し、参加を志望致しました。助産師になりたいと思い始めたのは、中学三年生の時。高校生になると、ESD やSDGs といった事柄について学ぶ機会が多くなりました。そのなかで、発展途上国など医療の設備が整わない国では、人手不足と不確かな知識・経験により、助かるはずの妊産婦と乳幼児助の命が、失われている現状を知りました。それ以来、私の夢は“安全なお産”という角度から、持続可能な社会を実現していくために貢献していける“国際的な助産師になる“に変わりました。そんな夢を抱きながら生活をしてきた私の元に舞い込んできたのが、このカンボジアスタディツアーの募集のお知らせ。私は迷わず応募に踏み切りました。

ー私のスタディツアーのテーマー

私が今回、スタディツアーのテーマとして設定したものは以下の2つです。

1. 出産、公衆衛生、ジェンダーに関するカンボジアの現状や教育事情、子供達の意識

ポルポト政権の影響で医師や看護師が不足しているカンボジアで、出産や公衆衛生、ジェンダーに関する教育事情と子供達の意識を、自分自身の目で見つめ、何ができるかを考える。

2. 我々、日本人の学生にかけている学びに対する姿勢

昨年度の報告書を読み、大きな教育問題を抱えつつも、一人ひとりの子どもたちが学ぶ喜びを実感しながら、日々の生活を送っていることを知る。経済こそ発展はしている日本だが、カンボジアの子供たちから学ぶべきことが多くある。その真髄を、子供達が学ぶ姿から見て、日本に持ち帰る。

ーテーマに対する答えー

1. 出産、公衆衛生、ジェンダーに関するカンボジアの現状や教育事情

* 出産・公衆衛生 *

出産については、実際にお産の現場に立ち会ったりはしませんでした。ガイドさんからの話を伺っただけでも、カンボジアのお産の文化を感じることができました。カンボジ

アでは出産は家族全員で迎えることが主流だそうです。日本では十分に整った環境の中で出産を迎えることができますが、出産の立会いは父親すら断られる病院も存在します。生まれてくる新しい命を家族みんなで迎えるスタイルは、とても素敵なことのように思います。伝統的な産婆さんにより自宅出産をする家庭が多いカンボジアですが、彼女たちのほとんどが専門的な教育を受けておらず、資格を持っていないことなども分かりました。予防接種などの普及により、妊産婦や乳幼児の死亡率は大幅に減少しました。しかし、未だに安心できる数値ではありません。さらなる改善を図るためには、お産婆さんへの確かな教育と、お産時の万が一に備え、周辺の病院やヘルスセンターなどと連携を取るなどし、強固なファウンデーションを築いて行く必要があると感じました。

ジェンダー

リエンダイ寺子屋に訪れた時の話です。男女が綺麗に別れて座っていることに疑問を感じた私は、ガイドさんに訳を聞きました。すると、カンボジアには昔からあることで、男の子は女の子と話すのが恥ずかしく、男女別れて座ることは高校まで続くことなどが分かりました。日本人には考えにくいですが“女性は白い布”と泥に染まりやすい純なものに例えるカンボジアならではのジェンダーのあり方を感じました。



また、インターネットや本の調べで、教育機会における男女格差が著しいことは知っていたつもりでしたが、実際に寺子屋を訪れ、女の子の人数が極端に少ないことに驚きを感じました。寺子屋に全く通っていない訳ではないけれど、家事を手伝うためにお休みせざるをえないそうです。しかし、昔のように「女の子には教育をさせるべきではない！」と言った考えはあまりなく、本当のところは女の子でも教育を受けさせたいと考える親がほとんどだそうです。私はこのように、人々のジェンダーロールに関する意識が変わったことは非常に良く、大きな変化だと感じています。ユネスコのカンボジア事務局のお話でも、ジェンダーや公衆衛生の重要性を理解し、教育をプログラムしていると強くアピールなさっていたことが印象に残っています。

2. 我々、日本人の学生にかけている学びに対する姿勢

学ぶということに関して、私たち日本人に欠けていて、カンボジアの人々にある姿勢。その答えは家庭訪問で訪れたお家に住むTちゃんが教えてくれました。それは“自分ではない他の誰かのために学ぶ”という事です。私は、将来人の役に立つ仕事がしたいと言っても、日々の授業やテストを受けている時、「これが誰かのためになる。」「助けなくては。」などと言う気持ちはなく、「ここで頑張れば自分のためになるから。」というように日々の学びは、自分のためにあり、怠けた結果も、頑張った結果も、全て自分だけに返ってくる。そう思っていました。しかし、Tちゃんは弟や村の人々を助けるために勉強していると、照れながらも私たちに教えてくれました。そして彼女は、「勉強している時間が一番幸せ。」とも言っていました。きっと勉強している一瞬、一瞬、弟や家族のことを考えているのでしょう。自分のために熱心に勉強できることは、もちろん素敵なことですが、誰かの人生を背負って学ぶ彼らと私たちでは、大きな違いがあることに気付かされました。どちらがいいというわけではなく、見習おうとしてできることでもありません。けれど”彼らの学びの環境を、夢を、支えていける人間になりたい”この思いが私の中で確実に大きくなりました。そして、そのためにも私は学び続けることをここに誓います。



←寺子屋で授業を受けるTちゃん

お話をしてくれているTちゃんとその家族→



—内戦とカンボジア—

私はカンボジアを訪れる前に、ある一冊の本を読みました。久郷ポンナレットさんの『虹色の空』という本です。彼女は10歳の時、ポル・ポト政権により最愛の両親と兄弟4人を殺されました。日本に逃れ、なんとか普通の日常を手に入れた彼女が、慰霊のために再びカンボジアを訪れるまでを描いた実話です。本の中に登場する、ポンナレットさんのお父さんが殺された場所が、まさに私たちの訪れたキリングフィールドでした。私たち以外にもツールスレンやキリングフィールドを訪れていた人は大勢いましたが、その多くは外国人で、学生以外のカンボジア人を見ることは全くと言ってよいほどありませんでした。ガイドさんに訳を聞くと彼はこう言いました。「カンボジアの人はこの事実を受け止め

きれていない。思い出したくないと思っている。またこのような場所に来ると霊が自分に助けを求め、責めている声が聞こえてしまうから、皆怖くて来られない。私も今鳥肌が立って仕方がない。」と。冷や汗をかきながら話す姿と、普段陽気な彼の声がかすかに震えるのを聞いて、ポンナレットさんが慰霊のため、この地へ足を踏入れる時に感じた恐怖と悲しみが、まるで稲妻のように私の体を駆け巡りました。「カンボジアの人々がここへ来るには、相当な勇気が必要だ。」生々しく残る酷い跡に耐えきれず涙を流しながら、私はそう確信しました。

今、この瞬間にも世界の至る所で、人々が憎しみ合い、殺し合いを続けています。カンボジアの人々の悲しみや苦しみは、何の教訓にも為されていないのでしょうか。今すぐ、無意味な争いをやめ、心の中に平和の砦を築いていくことが、私たち人類の最優先事項であると、再確認いたしました。



—さいごに—

生暖かい水槽の中でぬくぬくと育ってきた私にとって、この約1週間のカンボジアでの学びは、まるで大きな海に放されたような経験となりました。ここで得た出会いと経験は、間違いなく、このカンボジアスタディツアーでなければ実現できないことでした。また、現代は、個人が剥き出しとなって、多様化する社会と向き合っていくことが求められています。その中で自分が、カンボジアが直面する課題と、どう向き合っていくのかをとっても考えさせられました。今現在の私にできることは、学び続けること、そして、ここで得た学びを、自分の中で終わらせず、1人でも多くの人と分かち合い、共有していくことです。未来の国際社会を担っていく一員としての責務を果たしてまいります。

そして、このスタディツアーへの参加を、共に喜び、応援してくださった、先生方、友人、家族、そして、このスタディツアーで巡り会えた、先生方と仲間の皆に心から感謝いたします。